

## 学位審査結果報告書

学位申請者氏名 酒井 理恵  
学位論文題目 在宅要介護高齢者における口腔機能状態，栄養状態および食物摂取状況との関連

審査委員（主査） 柿木 保明



（副査） 福原 正代



（副査） 辻澤 利行



### 学位審査結果の要旨

高齢者の口腔機能や全身状態が、栄養状態や食事摂取状況に関連していることについて多くの先行研究が報告している。とくに、口腔機能との関連性に関しては、近年、臨床的な評価スケールである改定口腔アセスメントガイド（Revised Oral Assessment Guide: ROAG）を用いた判定によって、口腔機能障害やサルコペニア、栄養状態との関連性が明らかにされているが、食事や栄養素との関連については言及していない。また、これらの報告は入院患者や施設入所者を対象としており、在宅高齢者を対象とした報告は少ない。

そこで本論文は、在宅要介護高齢者の口腔機能状態と栄養状態および食物摂取状況の関連を明らかにすることを目的に調査研究を実施した。

対象者は、65歳以上の要介護高齢者で、歯科診査、質問紙調査などへの同意が得られた63名（男性25名、女性38名、平均年齢83.5±6.8歳）とした。口腔機能状態は、ROAGを用い、口腔内の8項目について1～3点で評価し、合計スコア8点で良好（以下、良好群）、9～12点（軽度の口腔機能低下）と13点以上（重度の口腔機能低下）と判定し、今回は、8点以下群を良好群、9点以上を口腔機能低下群（以下、低下群）の2群に分けて比較検討を行った。また、各対象者に対しては、自立度および既往歴などの全身状態のほか、体組成計測、握力測定、口腔内診査、ROAGを用いた口腔機能評価、舌圧測定、血液検査、MNA-SFを用いた栄養状態評価（MNA-SF）、BDHQによる食物摂取状況を調査した。

その結果、2群間で、年齢、BMI、骨格筋指数（SMI）、握力、MNA-SFに有意差はみられなかった。良好群は低下群に比べて、Alb 4.0g/dl以上者が多い傾向にあり、舌圧35kPa以上者が有意に多く、認知自立度で要介護者が有意に少なかった。BDHQによる栄養素摂取量は、良好群は低下群に比べて、たんぱく質摂取量が70歳以上の推奨量以上摂取している者が有意に多く、ビタミンCの摂取量が有意に少なかった。食品群別摂取量は、良好群は低下群に比べ豆腐類、根菜類、脂ののった魚類の摂取量が有意に多く、いも類、柑橘類、洋菓子類の摂取量が有意に少なかったことから、口腔機能状態と栄養状態、食物摂取状況との間に関連がみられ、口腔ケアや食事管理・指導を歯科と栄養の専門職が連携して進めることで口腔機能の悪化予防につながる可能性が示唆されたと結論づけている。

研究デザインなどについていくつかの質問がされたが、在宅高齢者の口腔機能と栄養素との関連に関する有益なデータが出されたことは評価でき、またこれらの研究分野に関して十分な知識を有していたことから、審査委員会では、学位論文として価値あるものと判断した。